令和四年度
博士論文（指導教員　藏中しのぶ）

カンボジア人日本語学習者の《読解力》向上のための日本文学教材開発
―宮澤賢治『オツベルと象』を対象として―

（要旨）

大東文化大学大学院外国語学研究科
日本言語文化学専攻博士課程後期課程
学籍番号二〇二三三一五一
オルン・チャンポン

要旨

本研究は、カンボジア人学生に対する、宮澤賢治『オツベルと象』を教材とした「日本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」の「読解」指導のありかたに的をしぼり、日本の国語科教育から、何を学びとるべきかを考察し、あわせて、カンボジア人日本語学習用の日本語教材『オツベルと象』を開発し、さらに、クメール語訳を進めたものである。

研究方法は、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の現況をあらためて調査し、「日本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」の位置づけと役割を客観化するとともに、日本の文部科学省の「学習指導要領」と、これを反映した『オツベルと象』の「学習の手引き」「みちしるべ」に着目し、日本の国語科教育のなかで、『オツベルと象』がどのように指導されてきたのかを調査した。

さらに、カンボジア人用の教材『オツベルと象』のテキストと副教材としての『オツベルと象』の録音教材と『オツベルと象』のクメール語の翻訳教材を作成した。最終的には、それらの教材・副教材を王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の「日本文学」の授業に活かし、『オツベルと象』の授業計画を立案した。

第一章では、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の概要、本学科における各学年の科目の授業内容、使用教材および科目毎の授業の課題となる点を整理した。

第二章では、日本の「学習指導要領」および「国語科学習指導要領」の「読むこと」指導の変遷をたどり、その改訂の目的と意義を考察した。日本の「学習指導要領」は、現在までに十回改訂を行っている。「国語科学習指導要領」のなかの「読むこと」の指導に着目し、その内容の変遷を次のように時期区分して示した。

第一に、「学習指導要領」がまだ「(試案)」であった草創期の昭和二十二年度～昭和二十六年度である。この時期には、音読中心・速読の指導に重点がおかれていた。その後、昭和二十六年度の改訂では、速読よりも、内容を理解すること、読むことに興味を持たせることが重視される方向へと転換した。

第二に、昭和三十三年度～四十四年度である。この時期の「読むこと」の指導は、わかりやすく効果的に話す技能を身につけさせ、書かれている内容を理解させ、感じたことを人に伝える技能を重視している。さらに、昭和四十四年度には、自分が読んだことを相手に伝わるように「声に出して読む」ことを重視するようになった。つまり、朗読の指導を重視するようになった。

第三に、昭和五十二年度～平成元年度である。この時期には、話や文章の要点と事柄、そこに表れているものの見方や考え方をとらえ、情

景や心情を読み味わった上で、内容をまとめる力を重視するようになった。その後は、自分の考えや感想を持つこと、それを表現すること、さらに他者の考えを理解して、コミュニケーションをとっていく力が重視されるようになってくる。

第四に、平成十四年度～平成二十九年度である。平成十四年度以降、「伝え合う力」を高める指導が行われるようになる。自分が読んで理解したことに基づいて、それを自分の言葉で表現し、さらに、相手の言葉を理解して、共有することが重視されるようになったのである。そこには、他者への思いやりという人間関係の基本を、国語によって育成しようとする姿勢が示されている。

このように、日本の「学習指導要領」は時代によって変化を遂げながらも、四つの技能として、読む・書く・聞く・話すという能力の育成を軸とした言葉の教育を構築してきた。これらのなかから、特に、筆者が関心を寄せるのは、「音読」「朗読」である。

従来、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の「日本文学」（読解）の授業は、「音読」に終始していた。「音読」とは何かを考えるうえで、昭和二十二年度「学習指導要領（試案）」は、示唆的である。当時の日本の「中学校の生徒が本を読む事に慣れていない」ので、国語科の授業の中心に「音読」を位置づけていた。

この当時の日本の状況は、現在のカンボジアにとって、たいへん参考になると思われる。

現在も、カンボジアの授業では、「音読」を通して擬態語・擬声語といったオノマトペに注意する教育が行われている。

このような観点から、国語科教育における「音読」「朗読」の指導のありかたを、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の「日本文学」にどのように生かしていくべきかを考えるようになった。

第三章では、戦後の小中学校国語科教育における宮澤賢治作品の現状を確認した。特に、『オツベルと象』を掲載する日本の中学校一年生の国語科教科書の歴史を概観し、『オツベルと象』の教材史を整理した。

第一節では、戦後から現在に至るまで小中学校国語科教育における宮澤賢治作品の現状を整理し、特に『どんぐりと山猫』採用の意義を調べた。戦後最も早い時期から国語科教科書に採用された『どんぐりと山猫』は、ＣＩＥが要請した「学習指導要領（Course of Study）」「単元（Unit of Work）」と教材『どんぐりと山猫』本文の対応を検証した結果、『どんぐりと山猫』の教科書本文にはＣＩＥの要請に対応すると思われる次の三点が確認された。

第一に、当時『どんぐりと山猫』は、小学校四年生用の教科書に採用された。そのため、教科書の本文を確認した結果、生徒たちに主体的な興味・関心をもたせるために、原文「尋常五年生」を「四年生」に改変していると考えられる。

第二に、学校教育という制約から、宮澤賢治のもつ仏教の菩薩の思想が、完全に消し去られている。

第三に、どんぐりたちの裁判を描く『どんぐりと山猫』は、ＣＩＥのオズボーンが石森延男らに示唆し、石森延男が「参考」に掲出するにとどめた「単元」、「『われわれの意見は、他の人の意見によって、どんな影響をこうむるか』」を生徒たちに主体的に考えさせる教材という意義と期待をになって、当初、採用されたと考えられる。

第二節では、中学校国語教科書の『オツベルと象』の採用状況と掲載作品名を整理し、昭和五十五年の校本宮澤賢治全集刊行の前年、その本文研究の成果を承けて、「オッペル」が「オツベル」に改訂されたこと（鈴木貞美氏の御教示による）、教育出版が昭和二十八年から令和四年まで、最も多く『オツベルと象 』を採用したことがこの作品の知名度を上げたことを論じた。

第四章では、「国語科学習指導要領」と『オツベルと象』の「学習の手引き」を対照して分析した。『オツベルと象』の指導内容は、「学習指導要領」の改訂に次のように対応していた。

第一に、昭和二十六年度「国語科学習指導要領」と昭和三十三年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」では、『オツベルと象』は、音読・黙読の教材として位置づけられていた。

第二に、昭和四十四年度「国語科学習指導要領」は、これまでの教師主導型から、生徒の主体性を重視した指導へと転換した。これを基準とした「学習の手引き」では、登場人物の心情に着目し、場面の展開ごとに想像が深まっていくおもしろさを味わせ、そのうえで、生徒の感想・考えを重視するという生徒主体の指導へと転換する。

カンボジアでは教師主導型で授業が行われているが、日本のように学生の主体性を導きだすことは重要であり、「生徒への目標提示」は、今後、取り入れていくと良いであろう。

第三に、平成元年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」では、「音読」の指導が刷新される。それ以前の「音読」の目的は、表現のおもしろさを知るための音読であった。しかし、平成元年度以降、「音読」には「朗読」が加えられるようになる。それは、表現のおもしろさを理解したうえでの「朗読」である。

第四に、平成十四年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」は、他者の意見を聞きながら、内容の理解を深めるとともに、自分の考えを文章にまとめる力を重視している。

相手に理解しやすく伝えるためには、まず、自分自身の考えを日本語の文章にまとめることができなければならない。

この時期の「学習の手引き」には、物語の最終場面、「白象がさびしく笑って」の意味を問う設問が設定されている。この意味は学界でも問題とされており、きわめて難解な問いである。おそらく、カンボジアの授業でも、さまざまな意見がでることが予想される。それだけに、「白象がさびしく笑って」の意味を問う設問は、他者の意見を聞きながら、自分の考えをまとめるのに適しており、カンボジアの日本語指導でも取

り上げていきたい設問である。

第五に、平成二〇年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」である。この時期の教科書の「学習の手引き」の内容は、物語の構造に目を向けるようにという指導がなされている。物語の世界をより深く味わうためには、物語の構成と場面展開の特徴を把握することが重要であるとして、物語の中の「時間の流れ」を正しく捉える方法が記されている。

そこで、カンボジア人に指導する際に、導入として、物語の構造を図式化して示すことは、有効だと考えられる。

『オツベルと象』は、「ある牛飼いがものがたる」から物語が始まる。作品のなかで、牛飼いは時々登場して、物語の外側から解説を加える。こうした作品の構造を、最初に理解したうえで、物語を読み進めることが大切である。

次に、登場人物を把握することである。登場人物それぞれの言葉と行動を、正しくたどることが重要である。カンボジア人にとっては、この登場人物の言動と様子を、きちんと確認させていくという方法が整理しやすいと考えられる。

一方、平成二〇年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」では、「音読」の指導が大きくとりあげられている。その理由として、次のような「音読」の効果が期待されていると考えられる。

まず、「音読」「朗読」することによって、『オツベルと象』の三つの場面「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」ごとに、登場人物を区別することができる。また、「音読」することによって、会話文と地の文とを、はっきりと読み分けることができる。

つまり、「音読」とは、単に声に出して読むことに終わるのではなく、「音読」を通して、作品の構造や登場人物の理解をうながすための方法として機能していると考えられる。「音読」は、作品を理解し、それをあらためて、自分の表現として声に出して読むことで教育的効果が高まる。その考え方の原点には、『オツベルと象』が昭和三十六年の「学習の手引き」まで、「音読」を中心として指導されてきた経緯があるものの、当時の日本の「音読」の指導目的は短時間での多読であった。

それが、平成二〇年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」では大きく改訂された。「音読」が作品理解の到達点として位置づけられるようになったと理解することができるであろう。

第六に、平成二十九年度「国語科学習指導要領」を基準とした「学習の手引き」では、擬音語・擬態語といったオノマトペに代表される表現技法の考察が加わり、日本語の響きやおもしろさを体感させる内容となっている。

以上、戦後から『オツベルと象』の「学習の手引き」を概観し、日本の国語科教育における『オツベルと象』の「学習の手引き」にみる指導の変遷をたどることによって、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の「日本文学」の授業にとって、有意義な指導のあり方が見えてき

た。

第五章では、カンボジアの日本語教材およびクメール語翻訳テキストを作成するために、『オツベルと象』の本文研究をおこなった。

第一節では、改めて王立プノンペン大学外国語学部日本語学科「日本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」の現状と問題点を整理した。

第二節・第三節では、『オツベルと象』を掲載する初出雑誌『月曜』と新旧『校本宮澤賢治全集』を比校した。諸テキストの本文を比校したことによって、新旧校本の校訂が十四ヶ所あると確認された。このうち、「よくききねえ」「息で、石もナデカとばせるよ」「半白炭」「したが」「ばしやくらくなり」を再検討した。カンボジアに初めて紹介する『オツベルと象』の本文は、原文を尊重し、原文にできる限り近いものでありたいと考えたからである。

第四節では、『オツベルと象』をクメール語に翻訳するために、翻訳しにくいと思われる「のんのんのんのんのんのん」「大そろしいない」「変にぼうっと」の語釈を定義するために、調査を行った。

第六章では、カンボジア人用の日本語テキスト『オツベルと象』を作成した。テキストの作成過程は、次の通りである。

第一節・二節・三節では、『オツベルと象』の語彙・漢字・文型を抽出し、レベル分析を行った。その結果、『オツベルと象』は、四年次の学生にとって、未習語彙・漢字・文型が、それぞれ六十七語彙、一一〇字と四型であると明らかになった。この結果から、三年間の学習経験の平均データから類推すると、十五回の授業で十分指導可能な内容であると判断し、四年次の教材として適切であると確認された。

第四節では、漢字に留意した、『オツベルと象』のカンボジア人教材用のテキストを作成した。まず、カンボジア人日本語学習者の既習漢字と日本の中学校一年生が小学校六年間で学ぶ既習漢字との関係について調査を行った。その結果を踏まえて、新たに教える漢字と振り仮名を付す漢字を決定し、カンボジア人教材用のテキストを作成した。

第七章は、副教材としての『オツベルと象』のクメール語版と、クメール語の語釈を作成した。

第一節では、『オツベルと象』をクメール語に翻訳した。その際、いくつかの問題となる箇所があった。例えば「赤い龍の眼」の「赤い」がどの語にかかるのかという事例である。複数の解釈が生じるため、授業で学生たち同士が意見交換をする際の良い課題となるだろう。

第二節では、副教材の『オツベルと象』のクメール語の語釈を作成した。

第八章は、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科で『オツベルと象』を指導するために、第一節では、『オツベルと象』の物語の構造を分析した。そして、第二節では、物語の時間性を分析した。

『オツベルと象』の物語の構成を分析したことによって、物語は二つの世界が進行する重層的時間によって成立していることが確認された。

それらの具体的な推移は次のとおりである。

第一に、「語り手である牛飼いの時間」は、二十九日である。

第二に、「藁」の量、「月」の流れ、キーワードの「次の日」という基準から、牛飼いが語った物語世界内の時間を整理することで、「オツベルと象の物語の世界の時間」は、竹腰氏の指摘と同様、十二日間だと確認された。

『オツベルと象』は、作品の構成を踏まえて物語全体を理解する必要がある。そのため、カンボジアで『オツベルと象』の授業をする際には、最初の段階で物語の構成を説明することとした。

第九章では、聴覚的な副教材、『オツベルと象』の「朗読劇」の教材を開発した。藏中しのぶ先生、菅野友巳先生の御指導の下で、『オツベルと象』の朗読劇の脚本を作成し、日本人の院生・学部生の協力を得て、カンボジア人日本語学習者のための朗読劇録音教材、および、授業計画を作成した。

第一節では、日本の中学校国語第一学年用の平成二十四～二十七年版の教科書の「学習の手引き」と平成二〇年度「国語科学習指導要領」を分析した結果、「音読」を中心とした指導方法が確認された。しかし単なる「音読」に終始するのではなく、「音読」を通して表現のおもしろさ、作品世界の構造を理解し、登場人物の言動を正しく読み取る、作品読解の基本的な方法として重視していると確認された。

第二節では、カンボジア人日本語学習者向けの『オツベルと象』の副教材として、日本人ネイティブ・スピーカーによる朗読劇『オツベルと象』録音版の制作について述べた。

第三節では、カンボジア人日本語学習者のために、日本人学生とともに、朗読劇の稽古、および、その活動について報告した。

第四節では、副教材の『オツベルと象』の朗読劇の録音と『オツベルと象』のクメール語の翻訳教材を利用して、「日本文学」の十五回分の授業計画を作成した。

その十五回の授業は、指導者による講義をメインに据えるのではなく、個々の学生たちがグループ活動を通じて主体的に学習し、話し合いや発表の場を協同して作り上げるアクティブ・ラーニングを目指し計画した。授業での説明に際しては、副教材を利用するため、学習者の理解度は十分高まると考えている。